

園名： 中央区立京橋朝海幼稚園 所在地：中央区築地2-13-1  
 園長名： 竹谷直史  
 園児数： 43名 学級数：年少1、年中1、年長1 計3学級  
 教職員： 園長(1)・主任教諭(2)・担任(3)・補佐員(2)・用務主事(1)

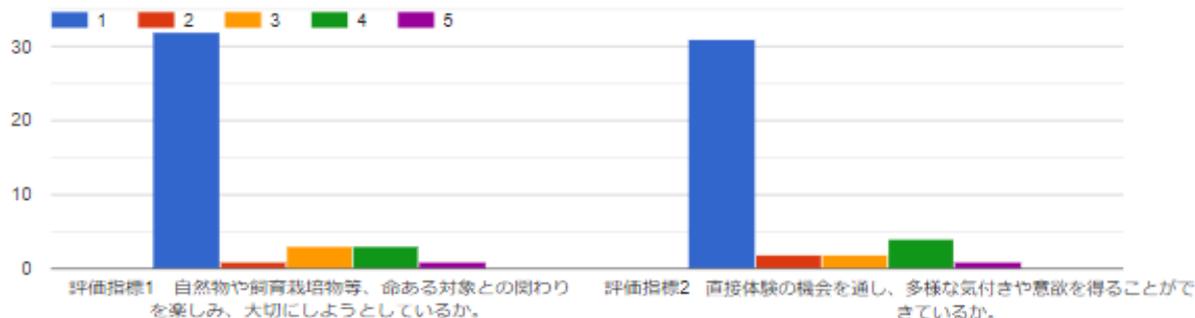
### 1 重点目標の達成状況及び取組状況

1・A：十分達成している 2・B：達成している 3・C：改善を要する 4・D：緊急に改善を要する 5：わからない

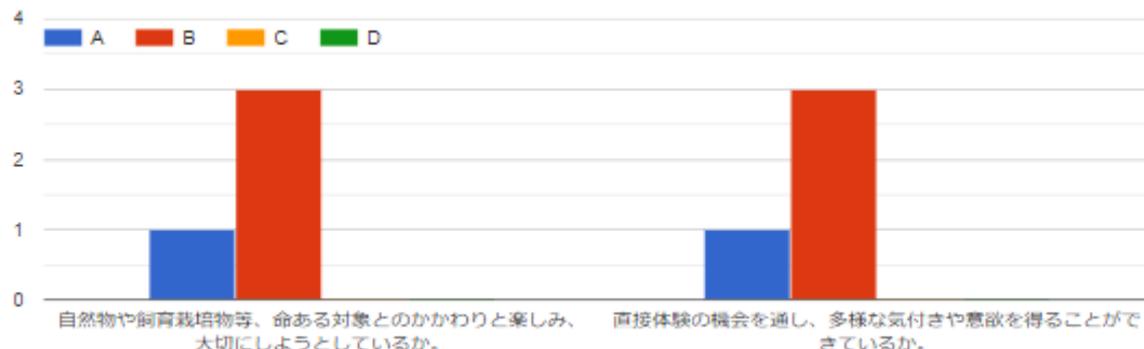
#### 重点目標1 自然環境の中で知的好奇心を育む

評価指標： ①自然物や飼育栽培物等、命ある対象との関わりを楽しみ、大切にしようとしているか。  
 ②直接体験の機会を通し、多様な気づきや意欲を得ることができているか。

保護者



教員



①も②も、保護者は85%、教員は100%のプラス評価であった。「すくすくポタジェ」（菜園）の更なる充実や昆虫類を呼び込む環境作り、戸外との活動につながりをもたせた保育室内の環境作り、屋上ビオトープへの訪問などに引き続き取り組んできた。自然物への興味・関心や関わり方は、幼児によって差が出やすい内容であるが、モデルとなる教師の動き、学級・園単位で定期的に「すくすくポタジェ」や屋上ビオトープに行く経験の積み重ねにより、自然物に抵抗感を示していた幼児が徐々に興味を向けるなどの変容も見られた。

内容に応じて適宜 ICT 機器を活用する機会も意識して設けてきた。便利な活用ができる機器である一方で、扱い方については、年齢毎に内容を精査するとともに安易に頼らないようにする必要があることも明らかになった。

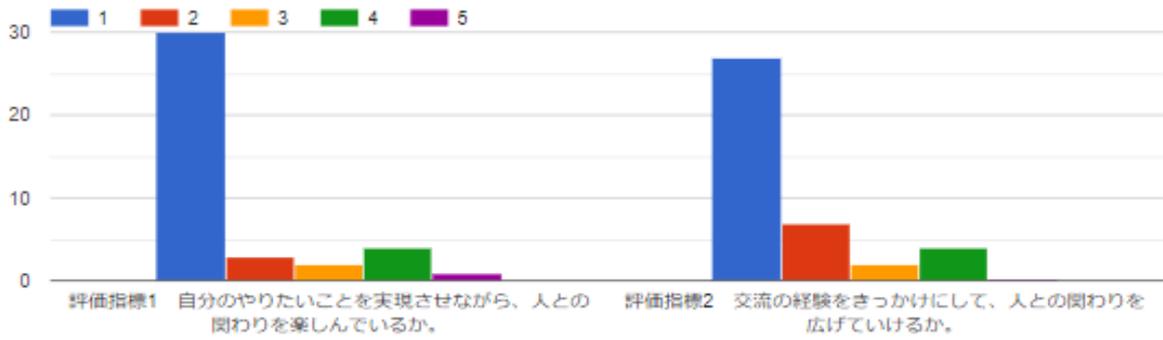
「すくすくポタジェ」は、配置や品種などを常に見直しながら、子どもたちの実態に即した新鮮で潤いのある内容にしていくことが大切である。多くの種類の植物を本来あった形に近づけながらともに育ち合える環境に、と、3学年の子どもたちの育ちを投影させた本来の趣旨を大切にしながら今後も取り組んでいきたい。

保護者にとっては、自然環境が豊かではない都心の園だからこそ、幼児にとって必要な経験であることの認識が高くあることや、内容が可視化できること、取組の様子や変容、成果が分かりやすい側面があったことも評価の背景にあるものと思われる。特に今年度取り組んだ「親子自然探索会」や「身近な公園を活用する教員の動画配信」は高評価であった。次年度もこの内容を更に深化・発展させた取組を推進していく。

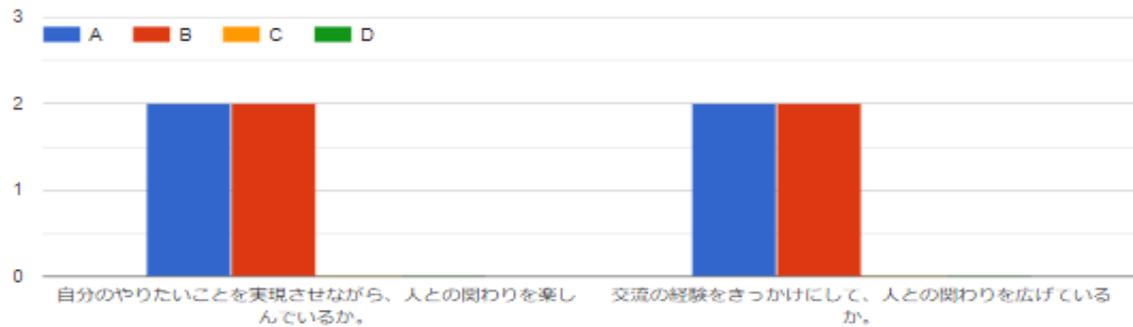
#### 重点目標2 人とのかかわる力を育む

評価指標： ①自分のやりたいことを実現させながら、友達との関わりを楽しんでいるか。  
 ②人との関わりを広げ、楽しんでいるか。

保護者



教員

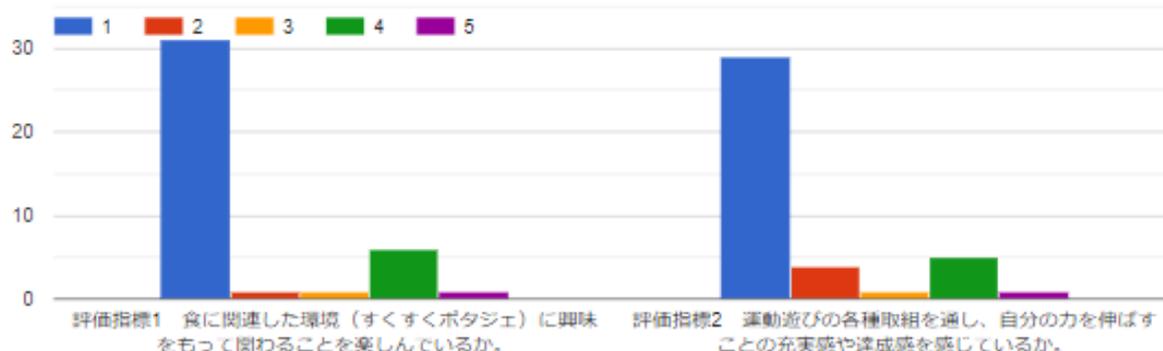


重点目標1と同じく、①も②も、保護者は85%、教員は100%のプラス評価であった。幼児も教員も互いの顔が分かり、人間関係を紡ぎやすい小規模園ならではの特徴を生かすとともに、開校・開園30周年の各種取組を通じて小学校との連携がより深まるように努めてきた。安定した学級集団を作ることを基盤としながら、日常的な場面の中で異年齢の幼児が関わる機会がより充実するよう、実践を重ねてきた。日常的に幼児同士が互いの学級を行き来する姿が増えたり、その延長線上の取組として各種行事もスムーズに実施できたりと、一定の手応えを感じることができた。異年齢交流においては、何よりも教員同士の連携が肝になることを念頭に、情報交換や内容を工夫したことの積み重ねと捉えている。小学校との連携においては、行事や活動において相互理解を深める機会が多くもてたため、小学校に向けて憧れを抱く幼児の姿や幼小の教員同士の関わりが増加など、今後につながる内容が多く得られた。外部との交流活動においては、オンラインツールも活用するなどしながら、内容や方法の工夫に努めてきた。泰明幼稚園との交流では、今年度は先方へ出向いて活動を楽しめたことや、次年度につながる手立ても共有できたことは大きな成果であった。同じ公立幼稚園であるため、教育内容を共有し改善・工夫を図りやすいなどのメリット面が多く質を高めやすい良さがあり、保護者からの期待も大きい。来年度も今回の内容をより充実・発展させながら取り組んでいく。また、昨年度は実施が叶わなかった高齢者施設との交流活動については、新たに社会福祉協議会を仲介にご縁ができた地域の方々との関わりをもつことが実現できた。地域に親しみをもつとともにより大切にしていこうとする態度にもつながることを実感できたため、次年度も充実するよう実施していく。

### 重点目標3 健康でたくましい体をつくる

- 評価指標：①食に関連した環境（すくすくポタジェ）に興味をもって関わることを楽しんでいるか。  
②運動遊びの各種取組を通し、自分の力を伸ばすことの充実感や達成感を感じているか。

保護者





①も②も、保護者は83%、教員は100%のプラス評価であった。食に関連した環境として、今年度で3年目の「すくすくポタジェ」の更なる充実に努めてきた。毎週水曜日の園庭個別降園の機会を生かしながら、保護者とその内容を共有できるようにしてきた。収穫した栽培物を使っての各種調理活動・会食については、制限を受けることもあったが、情報発信に努めるとともに親子で野菜を選んで持ち帰られるようにするなどの工夫を重ね、意識が持続できるように努めてきた。保護者アンケートの評価から、この環境のもつ意味や効果が継続して理解されているものと捉えている。

運動遊び推進園としての取組としては、校園庭や体育館などの広いスペースを活用したり、固定遊具に取り組みの機会を増やしたりしながら、各種運動遊びを推進した。改修工事により設置された複合遊具や室内ボルダリングゾーン、また、玄関ホールとみんなのへやではロープ登りなどの経験ができる設定もしながら、中央区の課題でもある「投力」「握力」にも対応しつつ多様に体を動かすことができるようにしてきた。固定遊具などの活用については、より発達段階に応じた経験ができるよう指導計画に位置付け、幼児がこの環境を使いこなし、達成感を味わえるようにすることを目指していく。体を動かす場や機会がもちにくい実態があるため、保護者からの期待も大きい内容であることを踏まえ、幼稚園で十分に体を動かす経験を積み重ねるとともに、その内容を保護者と共有し幼児の成長をともに喜び合えるようにしていく。

## 2 重点目標以外の自己評価における達成状況及び達成のための取組状況

<保護者による全体評価について>

- 保護者による全体評価は、17項目の全てが1・2（よくあてはまる・あてはまる）の評価が94%以上のプラス評価、うち9項目については100%であった。今回の評価に甘んじることなく、次年度も創意工夫を重ねた教育を推進するとともに、園務支援システムなども活用した発信内容をより充実させ、教育内容の理解促進につなげていく。
- 「設問1：幼児は幼稚園に行くことを楽しみにしている」については、3の評価（あまりあてはまらない）が2.8%であった。基本的かつ大切な内容であるため、1・2の評価で100%を目指してきた内容である。幼稚園が楽しく安心できる場所であることが感じられるように、保護者と密に連携を図りながら、一人一人の幼児に対して丁寧にかかわっていく。
- 「設問7：幼稚園は、幼児の年齢に応じて、していいこととしてはいけないこと等の規範意識を身につかせている」、「設問13：園舎内外の清掃・整理など環境整備が行き届いている」、「併設の小学校や近隣の保育園との連携が積極的に行われている」について、2～4%程度の5（わからない・無回答）の評価があった。評価にあたり、具体的な幼児の姿がイメージしにくかったり交流頻度が少ない学年であったりする背景があるかと思われるが、「年齢に応じた発達の見通し」を適宜保護者と共有するなど、理解促進に努めていきたい。
- 「設問7：幼稚園は、幼児の年齢に応じて、していいこととしてはいけないこと等の規範意識を身につかせている」、「設問11：幼稚園は保護者にとって相談がしやすく、親身になって対応している」は、2～3%の4（あてはまらない）の評価があった。一人一人の幼児や保護者に応じて、丁寧に関わるのが大切な内容であるため、1・2の評価で100%を目指していく。
- 今年度運用された園務支援システムなどの各種発信について、新たに「設問17：ルクミー等各種発信は、わかりやすく、理解促進につながっている」を設けた。特にルクミーでは、日々の子どもの姿や育ちを可視化できるよう、担任より週3回頻度で発信し、力を入れてきた内容であった。今後も受け手の側に立ったきめ細かい内容の発信に取り組んでいきたい。

<教員による全体評価について>

- コロナ禍の中、本来経験させていきたかった会食などの調理活動が制限を受けてきた一年となったため、直接・具体的経験ができる機会を作ることの大切さを再認識した。今年度、各種方法の工夫により別経験ができるようにしてきたことは成果の一つであったため、今後も適宜適切な経験ができるよう、創意工夫をしながら取り組んでいく。
- ボルダリングやぶら下がりロープなどの大規模改修工事により新設された遊具を、年齢や時期に即した活用ができるように実践を重ねてきた。この内容が定着するよう、次年度以降も更に内容を精査し、指導計画にも位置付けていく。
- 「日本の伝統・文化に親しむ活動」においては、日本で古来より大切にされてきた節句の由来などを知り親しめるような活動を一層充実させる必要性があると捉えている。教育活動においてそれぞれの内容にふさわしい経験ができるようにするとともに、保護者と共有し、家庭でも同様に扱っていただけるような取り組みを推進していく。
- 「情報提供 通知・ホームページにおける効果的な伝え方」について、園務支援システムを積極的に活用する体制を構築するよう努めてきたことの成果を実感できた。発信において留意した点としては、発信を目的とするのではなく、発信内容を核にして対話のきっかけを作り、幼児の成長とともに喜び合える体制を作ることであった。送迎の際に日常的に顔を合わせて話ができる良さを生かしながら今後も創意工夫を重ね、幼児期にふさわしい生活作りにつながるよう取り組んでいく。

### 3 今後の改善方策

- 本園にとって、「自然物とのかかわり」「人とのかかわり」「健康な心と体」の三本柱が重要であることが保護者と共有されているため、次年度もこの内容を更に充実・発展させるべく取り組んでいく。その中でも、特に「人とのかかわり」において、一人一人の幼児を大切にしたい集団作りに資するような取り組みを推進していく。
- 幼児の直接・具体的経験を後押しできるよう、教材研究を重ねながら ICT 機器を効果的に活用していく。
- 幼児期の発達について見通しがもてるよう、保護者会や学級懇談会の更なる充実を図る。また、保護者が子育てに必要な情報や心構えなどを得られるように、発信方法を工夫しながら日々の子どもたちの姿を教員の方から積極的に伝えていく。
- 毎週水曜日の「園庭での個別降園」は、幼稚園の活動や環境を目にしやすい利を生かしながら、開放感のあるスペースで保護者が園長や主任とも話ができる貴重な機会として活用することもでき、一定の成果を得ることができた。今後も本園の特徴の一つとして定着するよう取り組んでいくとともに、来年度より学年毎に園庭開放の機会を設け、降園後の遊び場の提供及び保護者同士や担任との関わりを深められるようにしていく。
- 未就園児親子向け施設開放「誰でも幼稚園」の回数を倍増し、年齢に応じた経験ができるようにするなどの更なる工夫も図りながら子育て支援の一助につなげるとともに、本園の特色を広く発信し、地域の幼児教育の要となるよう、取り組んでいく。